

## 上田女子短期大学第41・42回児童文化研究大会報告

平成30年度の「児童文化研究大会」は開催が年度末となり、同年度「所報」への報告掲載には至らなかったため、今回、令和元年度の大会報告と併載することとなった。「児童文化研究大会」は、内部研修の内容と、ゲスト講師をお招きしての公開形式で、隔年交互に開催する慣習となっており、平成30年度は前者、令和元年度は後者である。

### 第41回 地域資源と保育 ～短大・幼稚園の連携の可能性を探る～

第41回は平成31年3月18日に開催され、地域資源を活用した新しい保育のあり方を考えつつ、本学幼児教育学科と附属幼稚園のより緊密な連携、および附属幼稚園が学科の研究機関として、より有機的に機能する方策を模索する会となった。出席者は幼児教育学科と本学附属幼稚園の全教員、30年度の幼児教育学科卒業生1名、それに外部保育園の保育士1名であった。

まず附属幼稚園の水野園長から「塩田はこんなに面白い」の演題で、附属幼稚園近隣地域の伝承や自然環境に触れることをきっかけに展開された保育の概要が紹介され、ついで各クラス担任からさらに詳細な報告がなされた。それらの報告からは龍神伝説や河童の伝承に触発された子ども達の創造活動や、地域に生息する虫との出会いから地元の昆虫館探訪にいたるまでのいきいきとした様子が伝わって来た。

次に30年度の幼児教育学科卒業生が自身の卒業研究をもとに、「自然で遊ぶ子どもの姿と大人が子どもの遊びを見る視点 = 自然体験活動のフィールドワークを通して＝」と題する発表を行い、本学が行っている「やまほいくの里山」研修における経験から、大人の気付きにくい子どもの視点や、子どもの気付きに保育者がどう関わるべきか、などについての考察が語られた。

その後自由討論となり、自然など物的環境のみならず、地域の人的資源をいかに活用しうるか、また、子ども達の興味をいかにして「クラス活動」の中で発展させていくことができるか、などについて活発な意見が交わされた。

この回の成果は、次年度の「やまほいくの里山」研修の展開や「自然保育」関連の授業、またゼミ活動におけるアイデアなどにも大きな影響を与えることとなった。

### 第42回 保育の見直し ～保育の活動形態と子どもの経験の質を考える～

第42回は令和元年2月15日に、岸井慶子氏(東京家政大学教授)をゲスト講師にお迎えして開催され、県内のみならず広い範囲から幅広い年齢層の30余名(主として保育従事者)が参加した。

会は、冒頭、岸井教授からの「『一斉保育』だとか『自由保育』だとか、そんな、形態ありきではないところからご自身の保育を見つめ直して議論を深めていただきたい」という主旨の呼びかけについて、某保育園の活動の様子を撮影した映像が紹介され、参加者は全員でそれを視聴した後、5～6名ずつの小グループに分かれて議論する、という形式であった。

以下に紹介する当日参加者によるアンケートの一部と、終了後の本学酒井真由子准教授の感想から、本会の充実ぶりが伺えるであろう。

### 【アンケートより】

- 一つのエピソードから様々な見方、捉え方があり、自分の園にいるだけでは学べないことを学べた。
- 話し合うことの楽しさを感じました。正解のない幼児教育だからこそ、話し合うことが大切だと思いました。
- 多くの先生たちとの触れ合い、話し合いの中で、様々な発見がありました。考え続けることの大切さを改めて実感しました。
- さまざまな立場の方とのグループワークが本当に勉強になりました。改めて保育を見つめなおすよい機会でした。今日のようなワークが本当に面白かったです。

### 【酒井真由子准教授より】

ある一つのビデオをきっかけにみなさんと話をする中で、私自身が、これまで保育の活動形態に捕われていたことがよくよくわかり(まずは形から入っていた！)、私自身の凝り固まった考えを改めることができました。

熱い議論が交わされていたグループもあったようです(意見の対立があったが、後から考えると根底は同じだったといった連絡ももらいました)。

多様性をうたっている時代だからこそ、そして耳触りの良い言葉に惑わされないよう、みんなと同じ空間にいることの意味、それぞれの子どもの興味関心をもとにした保育とはどういうことなのか？、保育者がそこにいる意味、などをとことん考えていく必要があると思いました。

参加者の満足度は非常に高く、同様の形式での2回目の開催を望む声も多かった。さらに充実した研究大会を目指し、次年度に向けて計画を練っていきたい。

幼児教育学科：佐藤 厚 町田育弥